



COMIC

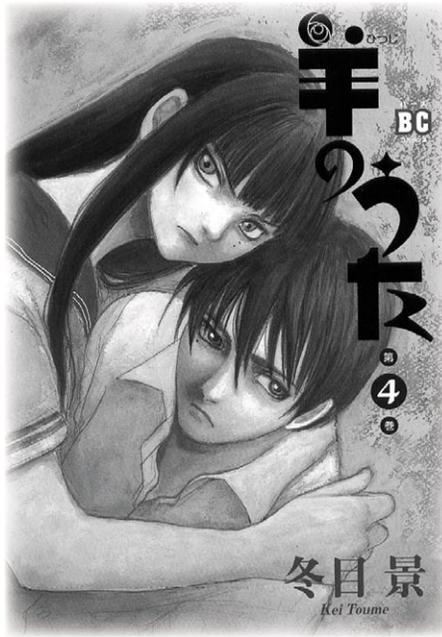
羊のうた

冬目景 幻冬舎 全7巻

ひと気のない川原、暮れなずむ空の下、二人の姉弟がいた。姉の腕からは血が流れていた、自ら切りつけた傷だった。彼女は腕を弟に差し出し、囁く。「わたしの血を飲んでいいのよ」

『羊のうた』の物語はこうにして幕を開ける。彼ら姉弟は呪われた血筋、人の生き血を吸わねばならない病気を持っていた。弟・一砂（かずな）は病気ゆえ隔離されて暮らしていた姉・千砂（ちずな）に再会し病気のことを聞かすが、自分も発病していることを認めたくなかった。一砂は自分が吸血鬼のような、人を傷つける危険な存在になるのが怖かったのだ。そんな折、彼に血を欲する発作が起こるが、千砂から渡された鎮静作用を持つ薬も使わず、人ごみから逃げて一人川原で苦しんでいるところを千砂に発見された。「(薬を飲んだら) 病気に負けたってことで……もう元の自分には戻れない気がして……」

見かねた千砂はなんと、自分の腕を傷つけ、一砂に差し出す。



「わたしの血を飲んでいいのよ。どんなにあがいても、どうにもなりはしないのよ。あきらめて、こっちへ来なさい。——こっちへ来て、一砂」

一砂は千砂の血を飲む。それは、彼ら姉弟の絆の証であった。孤独に生きてきた千砂は一砂を求め、一砂は千砂のために今までの日常から彼女のいる世界に踏み入る覚悟をする。

この作品は絶望を描いた物語だ。読めばあまりの救いのなささに憂鬱な気分になるだろう。世捨て人となり、二人だけで生きた姉弟。希望はなく、彼らの社会復帰は決して期待できない。だがたとえ希望がなくても、互いに深く愛し合った姉弟たちの心にはさわやかな風が吹いていた。この作品が読者の心をつつ理由の一つは、きっとそこにあるのだろう。

見方によっては、作品そのものが同人色が強く、作者の空想に終始しているような印象があることは否めない。だがそれでもやはり、本作は読者の心に何かを残す秀作であることは間違いない。

かんたん Cooking

今回ご紹介するのは、コーヒーと紅茶を混ぜる不思議な飲み物、『インヨン茶』です。

実は『香港珈琲』との異名の通り、発祥の地である香港では喫茶店でも飲めるくらい一般的な飲み物です。ぜひ一度試してみてください。

ちなみに「インヨン」とは「おしどり」という意味です。



珈琲 紅茶

インヨン 鴛鴦茶



～材料～

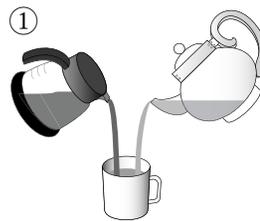
珈琲…飲みたい量の半分ほど

紅茶…飲みたい量の半分ほど

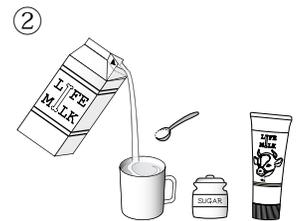
砂糖…適量

牛乳…適量

※砂糖と牛乳は、コンデンスミルクでも代用できます。



① コーヒーと紅茶を混ぜる。
※割合はお好みですが、最初は1：1で試してみましょう。



② 牛乳&砂糖、またはコンデンスミルクを溶かしたら完成！

ホットでもアイスでもOK。珈琲と紅茶の割合や甘さを調節して自分だけのインヨン茶を作ろう！

はみだし すてーじ

つつい記事よりも先に「はみだしすてーじ」の方へ目が行ってしまいます。⇒そんなあなたは、もう今月号の異変に気づきましたか？

(文・1 nya)
(おとなの事情ということで；編)